

平成23年度 教科に関する研究
研究主題「思考力，判断力，表現力をはぐくむ学習指導の展開」

外国語活動・外国語（英語）

自ら考え表現する外国語活動及び外国語（英語）科学習指導の展開

一言語活動を工夫しコミュニケーション能力を育成する

授業づくりを通して



目 次

1	主題について	1
2	授業研究	4
	【授業研究 1】 コミュニケーションへの意欲を高める学習指導の展開	4
	— 段階的なコミュニケーション活動を通して —	
	＜单元名＞ 小学校第 5 学年「自己紹介をしよう」	
	【授業研究 2】 教科書を活用した表現力を高める英語科学習指導の展開	9
	— モードを変換するライティング活動 —	
	＜单元名＞ 中学校第 3 学年「Interview with Ms. Kileo」	
	【授業研究 3】 自分の思いや考えを表現し合う学習指導の展開	14
	— 自己決定する場面設定の工夫を通して —	
	＜单元名＞ 小学校第 6 学年「行ってみたい国を紹介しよう」	
	【授業研究 4】 既習の学習内容を活用する英語科学習指導の展開	19
	— 画像にセリフを付け、発表する活動を通して —	
	＜单元名＞ 中学校第 2 学年「画像にセリフを付け発表しよう」	
	【授業研究 5】 言語運用能力を養う英語科学習指導の展開	24
	— 技能の統合的な指導を通して —	
	＜单元名＞ 高等学校第 3 学年「The First Mission to America」	
3	研究のまとめ	32

教科に関する研究主題：「思考力，判断力，表現力をはぐくむ学習指導の展開」

平成21・22年の2年間の研究では，学習指導要領や学校教育指導方針の趣旨を踏まえ，児童生徒に思考力，判断力，表現力をはぐくむことを目指して，創意工夫を生かした特色ある学習指導の研究を行った。今年度は，先の研究成果を踏まえて，より実践的な内容として，教科ごとに主題を設定し，研究を進めた。

外国語活動・外国語（英語）科研究主題

自ら考え表現する外国語活動及び外国語（英語）科学習指導の展開
—言語活動を工夫しコミュニケーション能力を育成する授業づくりを通して—

1 主題について

(1) 外国語活動・外国語（英語）科の目標について

小学校外国語活動及び中学校外国語（英語）科の目標については平成20年3月の学習指導要領で，また，高等学校外国語（英語）科の目標は，平成21年3月の学習指導要領で，次のように示された。

「小学校外国語活動」 平成20年3月

外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う。

「中学校外国語（英語）科」 平成20年3月

外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

「高等学校外国語（英語）科」 平成21年3月

外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

（____部は本資料作成者による）

下線のように小学校では音声面，つまり「聞くこと」と「話すこと」という活動を通して「コミュニケーション能力の素地を養う」ことを目標にしている。それを受けて中学校では「聞くこと」，「話すこと」，「読むこと」，「書くこと」という4技能を総合的に指導し，高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習の基礎を養う。高等学校では，中学校における学習の基礎の上に，聞いたことや読んだことを踏まえた上で，コミュニケーション

ョンの中で自らの考えなどについて内容的にまとまりのある発信ができるようにすることを目指し、「聞くこと」や「読むこと」と、「話すこと」や「書くこと」とを結び付け、4技能の言語活動の統合を図る。

(2) 改善の基本方針について

平成20年1月の中央教育審議会答申（以下、答申と示す。）の改善の基本方針では、小学校・中学校・高等学校において「コミュニケーション能力を養う」ことについては、次のように示されている。

改善の基本方針（抜粋）

- 小学校段階では、小学生のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、中学校段階の文法等の英語教育を前倒しするのではなく、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目標として、外国語活動を行うことが適当と考えられる。
- 「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等について、自らの体験や考えなどと結びつけながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう、中学校・高等学校を通じて、4技能を総合的に育成する指導を充実するよう改善を図る。
- 「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導と言語活動を一体的に行うよう改善を図る。

（___部は本資料作成者による）

下線のように、小学校では積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成をすることが重要である。言語活動を児童が楽しく取り組めるように工夫し、英語を「聞くこと」と「話すこと」を通して、英語特有の音に慣れ親しみ、その音には意味が伴っていることに気付かせる。

中学校・高等学校では、小学校で培われたコミュニケーション能力の素地の上に、4技能を総合的に、かつ統合的に育成する指導が求められる。中学校では、小学校での「聞くこと」と「話すこと」を、「読むこと」や「書くこと」につなげ、音声ばかりでなく文字にも意味が伴っていることを理解させる。さらに、「聞くこと」と「読むこと」を通して、その意味を表面的に理解するのではなく、話し手や書き手の意向を理解できるようにし、また自分の考えなどを「話すこと」や「書くこと」を通して表現できるように、4技能をバランス良く指導し、コミュニケーション能力の基礎を育成する。

高等学校では、音声や文字を使って、情報や考えなどを受け手として理解するとともに、送り手として伝える、双方向のコミュニケーション能力を養う。つまり、場面や状況、背景、相手の反応などを踏まえて、話し手や書き手の伝えたいことを把握し、自分が伝えたいことを伝えることができるコミュニケーション能力を育成する。

(3) 研究の基本方針

平成21年度の研究において、小学校では、限られた言語材料の中で、クイズ、インタビュー活動等を児童の発達段階に配慮しながら適切に組み合わせ、インタビューシート等の工夫を手立てとして思考場面を生み出し、児童が自分の思いや考えを表現する活動を試みた。中学校、高等学校では、必要な言語材料の提示・習得の後に自由度の高い発表場を設定することで、プレゼンテーションへ向けての段階的活動への取組を試みた。また、4技能を統合的に活用することができるようなインフォメーションギャップ（情報格差）、チョイス（言語材料の選択）、インタラクション（相互交流）というコミュニケーション活動の基本要素を盛り込んだ活動を通して、思考力、判断力、表現力を育む場面を創出することを試みた。

本研究では、前回の成果を踏まえ、小学校においては考えを表現し合う活動、つまりコミュニケーションを図る楽しさを体験できる言語活動の工夫をすることに重点をおく。コミュニケーションの楽しさを体験するためには、外国語を用いて伝え合う力が必要となり、伝え合うには相手が伝えようとしている内容を理解し、自分の気持ちや考えを相手に伝えることが必要である。具体的には、「自己紹介活動」や「行ってみたい国の紹介活動」をペアやグループで行うことを通して、自分の思いや考えを表現し合う活動を行う。

中学校においては、小学校外国語活動で培った「話す」、「聞く」コミュニケーション能力を、「読む」、「書く」技能につなげる活動を通して、考えを表現し合う学習の深まりを目指す授業の工夫をする。具体的には、画像に合う適切なセリフを考え、発表し合う活動や、教科書本文（論説文や小説）を会話形式の文に書き換える活動を行うことにより、見たり読んだりして理解した内容について自分で考え、既習の言語材料で表現する活動を通して、思考力、判断力、表現力を育む。

高等学校においては、「聞く」、「話す」、「読む」及び「書く」の4技能を統合した言語活動の工夫と実践をする。具体的には、リテリング活動、つまり読んだ内容について書いたり、話したりして再現する活動を行うことによって、4技能の統合を図る。その言語活動を通して、英文をよりの確に理解し、適切に伝えることができる言語運用能力を養い、思考力、判断力、表現力を高める。

(4) 主題に迫るために

- | |
|---|
| <p>ア 小学校・中学校・高等学校の連携を考え、それぞれの発達の段階に応じて身に付けさせたい技能や言語材料を活用できる言語活動と指導方法を考案する。</p> <p>イ 小学校では「外国語への慣れ親しみ」、中学校・高等学校では「表現の能力」と「理解の能力」の観点等で評価の指標を作成し、活動前に児童・生徒に提示することで活動に目標をもって取り組ませ、かつ活動中の児童・生徒の変容を見取る。</p> |
|---|

この2点を踏まえ、具体的な手立てを講じた授業研究を行う。

2 授業研究

【授業研究1 小学校】

コミュニケーションへの意欲を高める学習指導の展開 — 段階的なコミュニケーション活動を通して —

1 主題について

外国語活動では、外国語を通じてコミュニケーション能力の素地を養うことが目標とされている。素地を養うためには、コミュニケーションへの積極的な態度を身に付けることが大切である。コミュニケーションへの積極的な態度とは、自分が考えていることを表現できることや他者の思いを受け止めたりするための語彙や表現力・理解力が豊かである姿と考える。

そこで、外国語を用いた段階的なコミュニケーション活動によって、相手に伝えようとする意欲をもち、相手の思いを受け止めるための語彙を知り、それを楽しみながら使っていく活動を通して、コミュニケーションへの意欲を高めることができるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 目指す児童像

- 自分の考えを積極的に伝えようとする児童
- 相手の気持ちを考えながら活動しようとする児童

3 単元名 「自己紹介をしよう」

4 単元の目標

- 自分の考えを相手に伝えたり、相手の話を受け止めたりする活動に意欲的に取り組もうとする。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- 基本的なあいさつや聞き返しの表現を用いながら友達とコミュニケーションを図ることを通して、様々な英語の音声やリズムに慣れ親しむ。(外国語への慣れ親しみ)
- 英語を用いた対話活動で、言葉のもつ面白さや、文化の違いに気付く。
(言葉や文化に対する気付き)

5 教材観

本単元は、英語ノート1 Lesson4「自己紹介をしよう」、英語ノート2 Lesson4「できることを紹介しよう」を関連させたものである。先生についてクイズ形式で出題し合う活動で、先生当てクイズを行う。

使う言語材料は「食べ物、動物、スポーツ、色、できること」など学習したものを取り扱う。使用する表現は、“like ～”，“can ～”とする。その中で，“Thank you.”，“You are welcome.”，“Once more, please.”や，“Slowly, please.”など、相手とのやりとりができるような表現にも慣れ親しませ、多くの友達との対話により安心感をもち、単元のま

とめである先生クイズで自信をもって発表できるようにしていきたい。

6 児童の実態

本学級の児童（男子23人，女子11人，計34人）は，入学時より年間35時間の外国語活動を行ってきている。ALTも常時勤務しており，休み時間や給食など多くの時間で簡単なあいさつを英語で行い自然な交流をしている。

意識調査の結果（表1）から，多くの児童が外国語活動の時間を楽しみにしていることが分かる。歌やチャンツ，あいさつなどで元気よく発声している児童も多い。しかし，英語やジェスチャーを使って，自分の考えや気持ちを伝えようとする場面では，実際には表現に戸惑ってしまう場面も多く見られる。また，友達の気持ちを考えて関わることに苦手意識がある児童も9人いる。外国語活動の時間をあまり楽しくないと感じている児童もあり，その理由として「話している英語が分からない。」ということ挙げている。意欲はあるが，分からないことを聞き返すことができないことや，間違いを恐れてしまうことが原因として考えられる。

表1 外国語活動に関する意識調査（平成23年6月3日実施 第5学年2組34人）

質問内容	回答 (人)			
	とても楽しい	楽しい	あまり 楽しくない	楽しくない
1 外国語活動の時間は，楽しく活動できていますか。	11	18	5	0
2 友達の良さを知り，相手の気持ちを考えて関わるができますか。	2	23	7	2
3 英語やジェスチャーを使って，自分の考えや気持ちを伝えることができますか。	6	22	5	1
4 分からないことがあったとき人に聞くことができますか。	9	18	5	2
5 ○○小学校の先生で知っているのは何人ですか。（先生の総数36人）	20人以上	15～19人	10～14人	9人以下
	5	10	16	3

7 研究主題に迫るための手立て

(1) 評価の指標の活用

単元のねらいが達成されたかどうかを，児童の表現活動で評価していく。評価の指標を活動に入る前に児童に見せ，目標とさせることとする。今回は，特に分からないことを“Once more, please!”, “Slowly, please.”を使って聞き返したり，相手の反応を見て表現を変えたりすることができるようにする。

(2) 段階的な表現の場と学習形態の工夫

本単元は，4時間で構成する。1時間目では，様々なものの英語での言い方を知り，自己紹介カードを作成する。2時間目は，作成した自己紹介カードを基に，多くの友達と対話形式で自己紹介をする。その後，数人のグループに分かれて，自己紹介カードを活用したキャラクタークイズの準備をする。各グループでアニメのキャラクターを設定し，そのキャラクターを英語やジェスチャーで紹介するものであり，3時間目

に学級全員を対象としてクイズ大会を行う。4時間目は、自分で調べた先生方について、クイズを作成し発表する。

このように、個人→グループ→学級全体と段階的に表現の場を広げていくことで、友達との相互理解を深め、助け合いながら活動に取り組むことができるようにする。

(3) キャラクタークイズと先生当てクイズの進め方の工夫

3時間目に行われるキャラクタークイズは、まず、グループで一つのキャラクターを設定し、グループ全員でその設定したキャラクターの好きなもの、苦手なもの、できることを確認して絵に描いたり、英語で伝える言い方を考えたりする。そのクイズを発表する場面では、そのキャラクターの特徴を一人ずつ発表し、そのキャラクターが何かを推測させるものである。

4時間目の先生当てクイズでは、グループで各6人の先生を担当し、休み時間等を使って、一人ずつ先生方にインタビューをし、それぞれの先生方の特徴を調べることとする。キャラクタークイズを体験させておくことで先生当てクイズに容易に取り組めるようにする。

8 指導と評価の計画（4時間取り扱い）

時	主な活動内容	コ	慣	気	評価規準（方法）
1	「自己紹介をしよう」 好きなもの、苦手なもの、できることなどを紹介する。		○		・好きなもの、苦手なものを英語で言っている。（行動観察） ・外来語と英語の音の違いに気付いている。（行動観察）
2	「自己紹介をしよう」 自己紹介をする。	○			・好きなもの、苦手なもの、できることなどを英語で言おうとしている。（行動観察）
3	「キャラクタークイズをしよう」 キャラクターカードを使って、クイズを出す。		○		・キャラクターに関して、工夫して、クイズを出したり答えたりしている。（行動観察）
4 本時	「先生当てクイズをしよう」 調べておいた先生の情報を使い、先生当てクイズを行う。	○			・先生に関して相手に伝わるように工夫しながらクイズを出したり答えたりしている。 (行動観察・振り返りカード分析)

9 授業の実践

(1) 目標

○ 先生当てクイズに意欲的に取り組み、工夫しながら出題したり、答えたりして友達やALT、学級担任とコミュニケーションを図ろうとする。

(2) 準備・資料

CDプレーヤー、絵カード（色・もの）、先生カード（写真：B5）、振り返りカード、ポイントカード、“Once more, please!”、“Slowly, please”のカード

(3) 展開

時間 (分)	児童の活動	(◎は評価)	
		教師の指導 (HRT)	教師の指導 (ALT)
5	1 あいさつをする。 2 チャンツをする。	・ALTに続けてあいさつする。	・ジェスチャーを使って元気にあいさつする。 ・チャンツの手本を示し、一緒に楽しく行う。
5	3 タイムプレッシャーゲームをする。 制限時間内に色・もの、できること等を一人ずつ発表し、全員が終わったら終了となる。	・分からないときは友達に教えてもらっても良いことを確認する。	・絵カードを用意し、黒板に掲示しながら言い方を確認する。
10	4 先生クイズの進め方を知り、グループで作戦を立てる。 Hint 1 好きな色 Hint 2 好きなもの Hint 3 得意なこと	・先生クイズの進め方を確認する。 ・デモンストレーションを通して進め方を理解させる。	・デモンストレーションを行う際、クイズの出題者になる。 ・児童が作戦を立てるとき表現方法などを助言する。
20	5 先生クイズを行う。 ①出題者側は、調べた先生の写真をすべて黒板に掲示する。 ②出題者は一人ずつ発表する。 ③答える側はグループで相談して答えを決め、みんなで一斉に答える。	・クイズを行う際のルール、マナーについて確認する。 ・クイズの出し方が分かりにくかった場合、質問して良いことを告げる。	・2グループに分かれてクイズをすることを告げる。 ・"Once more, please!", "Slowly please"の言い方を教える。 ・絵カードも準備し、黒板に掲示する。
		・クイズの出題を失敗しても大丈夫だという安心感を与え温かい雰囲気が進められるよう配慮する。 ・友達同士で助け合っている様子が見られたら賞賛する。	◎先生当てクイズで自分が調べたことを工夫しながら出題したり、答えたりしている。 (行動観察・振り返りカード分析)
3	6 活動の振り返りをする。 振り返りカードに、今日の活動を振り返り、記入する。その後、気付いたことや感じたことなどを発表する。	・今日の活動を友達の様子や言葉で振り返ることができるよう促す。	・今日の活動で良かったことを話し、賞賛する。
1	7 ポイントカードにスタンプをもらう。	・円滑に進むように児童に声をかける。	・ポイントカードにスタンプを押す。
1	8 あいさつをする。	・終わりのあいさつをする。和やかな雰囲気で行うようにする。	

10 授業の分析と考察

(1) 評価の指標の活用について

今回の授業の前に、評価の指標を提示し、振り返りカードの裏面に印刷して使用した。その結果、先生当てクイズを作成するときに、分からないことをALTや担任に積極的に質問したり、説明が聞き取れない時には、聞き返したりすることができる児童が多くいた。英語で分からないことを質問したり、別の表現で言い換えたりと、自分の思いや考えを伝えようと意欲的に活動する児童が育ってきているように思う。

(2) 段階的な表現の場と学習形態の工夫について

小グループでの自己紹介等の発表活動は、聞き手が少ないので、自分の考えていることを伝えることができる児童が多かった。しかし、全体に向けての発表となると声が小さくなる児童もいた。しかし、段階を踏まえた活動と学習形態を工夫することで発表を苦手としていた児童も同じグループの友達からのアドバイスを受け、小さい声ではあったが発表することができた。このことからコミュニケーションへの意欲を高めることにつながったと考える。

(3) キャラクタークイズと先生当てクイズの進め方の工夫について

キャラクタークイズづくりの経験があったため、先生当てクイズ作りでは意欲的に取り組む姿が見られた。同じようなクイズづくり活動を課題を変えて取り組ませることで、スムーズに次の活動につなげることができた。キャラクタークイズで全児童が出題したり答えたりしたこともあり、先生当てクイズ作りでは、グループ内で次のようなやり取りが行われていた。

児童A：〇〇先生はタヌキが好きなんだよ。 児童B：へえ～そうなんだ。でも、タヌキって英語でどう言うのかな。 児童C：分かんないよ。じゃ～先生に質問してみようか。 児童D：でも、みんなも分からないと思うから、絵で描いたほうがいいよ。 児童A：そうだね。みんなが分からないとクイズにならないもんね。

聞き手を意識して表現を工夫しようとしたことが、このやり取りから理解できる。このことから、クイズの進め方を工夫したことで、自分の思いをどのように工夫すれば相手に伝えることができるかを意欲的に考えることができたと考えられる。

11 課題

評価の指標を簡単な形で児童に提示し、継続して活用していけるように、内容を吟味していきたい。また、普段使い慣れていない外国語を使うことで、言語を用いてコミュニケーションを図ることの難しさを体験させるとともに、その大切さを実感できるような単元構成を考えていきたい。

教科書を活用した表現力を高める英語科学習指導の展開
— モードを変換するライティング活動 —

1 主題について

中学校学習指導要領外国語科の改訂の趣旨の一つに、『聞くこと』や『読むこと』を通じて得た知識等について、自らの体験や考えなどと結び付けながら活用し、『話すこと』や『書くこと』を通じて発信することが可能となるよう、4技能を総合的に育成する指導を充実する。」とある。「聞くこと、読むこと」の受信から「話すこと、書くこと」の発信へとつなげることが大切であるということである。本研究では、読むことから得た知識等を活用し、説明文における論の展開などを理解しながら、会話における場面の要素を適切な表現を用いて書く力を表現力と捉え、学習指導を展開する。

教科書は、コミュニケーション活動の基本素材であるばかりでなく、生徒にとって最も重要な学習素材である。そこで教科書を活用し、読むことから得た知識等を活用しながら場面に合う適切な表現を用いてモードを変換するライティング活動を実践することで、表現力を高めることができるのではないかと考え、本主題を設定した。なお、モードとは「対話文」や「説明文」という異なる文体を指し、モードの変換とは、「対話文」を「説明文」に書き換えたり、「説明文」を「対話文」に書き換えたりすることとする。

2 目指す生徒像

- 読み取った内容を活用し、場面や状況に応じた適切な表現を用いて書くことができる生徒
- 4技能を統合的に活用することができる生徒

3 単元名 「Lesson 2 『Interview with Ms. Kileo』」 (New Crown English Series 3)

4 単元の目標

- 「読むこと」の言語活動に積極的に取り組もうとする。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- 場面や状況に応じた適切な表現を用いてモードを変換し、対話文を書く。
(外国語表現の能力)
- 題材について、その内容を正しく読み取る。
(外国語理解の能力)
- 国際交流の現状についての知識を身に付けている。
(言語や文化についての知識・理解)

5 教材観

本題材では、タンザニアから農業の研究をするために日本に留学をしているキレオさ

んに、健が学級新聞作成の取材をしている場面を扱っている。英語でのインタビューの仕方や、国際交流の現状についての知識を深めることをねらいとしている。

6 生徒の実態

表1で示すとおり、英語の学習で「話すこと」と「書くこと」を苦手としている生徒は合わせて全体の7割である。苦手としている理由の共通点に、「言いたいことを英語にすることができない」ことを挙げている生徒が多かった。

表1 英語の学習に関する意識調査（平成23年9月15日実施 第3学年A組40人）

○英語の学習で特に苦手な活動は			
・話すこと	21人	・書くこと	10人
・聞くこと	6人	・読むこと	3人
○話す活動が苦手な理由			
・自分の言いたいことを瞬時に英語にすることができないから。	18人		
・自分の英語の表現に自信がないから。	2人		
・単語の発音やアクセントが難しいから。	1人		
○書く活動が苦手な理由			
・単語のスペルを間違えたり、文法表現でミスをしたりしてしまうから。	7人		
・日本語から英文にするとき、どの文法を使えばいいのかわからないから。	3人		

表2の対話文を書く実態調査では、6文で構成された説明文の変換活動で、3往復で対話を終了した生徒が21人と一番多かった。疑問詞を用いずに文を作った生徒は11人であった。疑問詞を用いた英文など様々な疑問文を用いれば、読み手により分かりやすく表現できる文もあった。

表2 対話文を書く力に関する実態調査（平成23年9月15日実施 第3学年A組40人）

○6文で構成された説明文を対話文に変換する活動			
・3往復で書いた	21人	・4往復で書いた	17人
		・5往復以上で書いた	2人
○疑問詞を使った疑問文を利用した回数			
・0回	11人	・1回	22人
		・2回	6人
		・3回	1人

7 研究主題に迫るための手立て

これまで授業で実践してきたライティングの活動については、感想文、要約、スキット作成、自由英作文などを行ってきた。生徒は熱心に活動に取り組むが、教師のねらいとするものと異なる作品が多かった。このような授業の反省から、評価の指標をモード変換する活動前に提示することと、以下の三つの手立てを考えた。

(1) 教科書の活用の工夫

授業の教材の中心は「教科書」である。表現力を高める上で大切なことは、毎時間の表現活動を継続することであり、教科書の活用は欠かすことはできない。今回は教科書の本文を元に、教師がモードを対話文から説明文へ変換をし、生徒に提示をする。生徒はその説明文を読み取って、場面を考えながら適切な表現を用いて、モードを対話文に変換するライティング活動を行う。また、生徒が書いた英文をお互い添削する際にも、教科書本文を確認すれば添削することができるようにする。

(2) モードの変換

教師が提示する説明文を、生徒はモードを変換して対話文に書き換えるライティング活動を行う。その際、モードの変換の視点として、三つのポイントを指導する。

ア Content Word への着目

Content Word とは単独で用いられても意味をもつ語であり、主に名詞、動詞、形容詞、副詞等の内容語がこれに該当する。生徒へは、「誰が、いつ、どこで、誰と、何を、どのように」に当たる 5W1H に着目して対話文を作るように指導する。

イ 時制の確認

英文には時制が必ず付いて回る。モードの変換をする際にも大変重要な部分である。現在形なのか、過去形なのか、単純に教材の英文の時制を読み取るだけでなく、変換の際に質問文と応答文の時制が一致しているかを着目するように指導する。

ウ 疑問文の活用

説明文から対話文に変換をしていくので、基本的には疑問文を活用してライティング活動をしていくことになる。Are you ~? Do you ~? に加え、Content Word を意識した疑問詞を用いた疑問文、付加疑問文 You like soccer, don't you? や否定疑問文 Don't you like soccer? 等さまざまな疑問文を用いるように指導する。

(3) 学習形態の工夫（ピア・フィードバック）

活動は、インタビュー形式の対話文に変換していくので、モードの変換はペアで行わせることにする。隣同士の男女をペアとし、二人で一つの対話文を作成し、その後、2ペアを4人1グループにして発表する活動を行う。読み手、聞き手を明確にすることで書く活動に目的が生まれ、読み手、聞き手を意識した自然な対話を心掛けることにつながると考える。最後にペア同士の原稿を交換し、教科書の本文を見ながらお互いの原稿を添削し合う活動をする。

8 指導と評価の計画（3時間取り扱い）

次	時	学習活動と内容	関	表	理	知	評価規準（方法）
1	1	・題材の概要を捉える。	○				・理解できないところがあっても読み続けている。（活動観察）
	2	・題材の概要を捉える。					○
2	3 本時	・題材の概要を対話文 に書き換える。		○			・場面や状況に応じた適切な語彙や文法を用いて対話文形式で書いて表現することができる。（ワークシート）

9 授業の実践（本時の指導）

(1) 目標

○ 場面や状況に応じた適切な語彙や文法を用いて、対話文形式に書き換えて表現する。

(2) 準備・資料

パソコン、プロジェクタ、ワークシート、実物投影機、DVD

(3) 展開

時間 (分)	学習活動と内容	指導上の留意点・評価(◎評価)
2	1 Greetings	<ul style="list-style-type: none"> ・ 明るい雰囲気であいさつをし、英語学習に取り組む環境づくりをする。
2	2 Today's Target <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> Let's write an interview script. </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 課題を提示し、本時の内容を押さえる。
8	3 Explanation of Today's Activity (1) デモンストレーションを見る。 Dialog: a conversational style Kevin: I saw a musical yesterday. It was performed by deaf people. Sakura: Was sign language used? Kevin: Yes. It was very moving. I want to learn sign language. Sakura: I hear there are sign language classes at City Hall. Kevin: Really? When are they held? Sakura: Every Saturday. (2) モードの変換のポイントを知る。 (3) 評価の指標を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 変換前の文をプロジェクターで投影しておき、デモンストレーション後に、対比して見られるようにする。 ・ 5 W 1 H について触れられている部分に視点を置くことを助言する。 ・ モードの変換のポイントと評価の指標をスクリーンに映しておくことで、生徒が常に意識することができるようにする。
30	4 Discourse Transformation Activity (1) ペアで対話文を作成する。 (2) 音読練習をする。 (3) 4人1グループ(2ペア1組)で、お互いの原稿を発表する。 (4) 原稿を交換し、教科書を見ながら対話文の修正をする。	<p style="text-align: center;">Let's rewrite the story!</p> <p>下の文章を、「自然なインタビュー」の女になるように、ペアで表現してください。それぞれの台詞は英文を向文利用しても構いませんが、2人のやりとりは4往復以上であることとします。(下線より多いやりとりであること)</p> <p>状況説明 [Ken has to make a report. He made an appointment with Ms. Kileo. Today, he will interview with Ms. Kileo.]</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 80%;"> <p>Ken meets Ms. Kileo. He wants to interview her. She is glad to talk with Ken. Ken asks her a few questions. Ms. Kileo came to Japan in 2002. She has lived in this town since 2003. So Ms. Kileo has been in this town for several years. She likes her life in Japan and she feels the people are very kind.</p> </div> <p>Ken: _____</p> <p>Ms. Kileo: _____</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 辞書の利用を促し、分からない場合は質問してもよいことを伝える。 ・ 終わったペアには音読練習をさせる。
5	5 Sharing & Watching DVD (1) スクリーンで対話文を見ながら対話文の発表を聞く。 (2) DVD で教科書のモデル対話を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分たちが書いた英文と比べて見るように伝える。 <p>◎場面や状況に応じた適切な語彙や文法を用いて、対話文形式に書き換えて表現することができる。(ワークシート)</p>
3	6 Consolidation 自己評価表の記入をする。	

10 授業の分析と考察

(1) 教科書の活用の工夫について

教科書の対話形式の本文を、説明形式に書き換えて活用したことは、読むことから得た知識等を活用し、説明文における論の展開などを理解しながら、対話における場面や状況に応じた適切な表現を用いて書く力を高める上で効果的であったと考える。

(2) モードの変換について

モードを変換する前に、モード変換のポイントと評価の指標を提示したことで、生徒から次のような感想があった。「どんな対話文を書けばよいか分かった。」「どのくらい英文を書けばよいか分かったので頑張れた。」具体的な達成目標をもたせることが表現力を高めようとする意欲につながったと考える。

モードの変換については、「元の文を対話文に直すというのは、場面や登場人物を考えなければならないので難しかった。でも楽しかった。」とあった。モードの変換は、場面や状況を正しく理解しなければ適切な表現に書き換えることはできない。「難しかったが、楽しかった。」という感想は、そこに思考力・判断力が育まれたからと考える。読み取った知識や情報を活用し、場面や状況に応じた適切な表現を用いて書くことが表現力を高めることにつながったと考える。

(3) 学習形態の工夫（ピア・フィードバック）について

対話文をペアで考え、発表し、添削し合うという一連の活動は、単純になりがちなライティング活動を活性化するばかりでなく、4技能の総合的な育成につなげることができたと考える。「二人で英文の間違いを訂正して、対話文に仕上げることができた。」とペアでの活動が有効であったとする感想が見られた。また、「自分で書いた英文と教科書の文を比較することで適切な表現方法に気付いた。」「友達の英文を読んだときに、元は同じ英文なのに多様な表現方法があることを知って驚いた。」など、教科書の活用と、互いの英文を読み合うことが、表現力を高めることにつながることを実感したことがうかがえる。

11 課題

(1) モードの変換について

モードを変換した対話文の評価については、今後、対話文の質と量の視点から更に深く追究していきたい。

(2) 活動形態の工夫(ピアフィードバック)について

ピアフィードバックを行ったが、教師からの多くの修正が必要であった。表現力を高める際には、聞き手、読み手に正しく伝わるのが大切なので、今後もより正しく伝わるようなフィードバックを研究していきたい。

<参考文献>

伊藤治己「アウトプット重視の英語授業」教育出版 2008

自分の思いや考えを表現し合う学習指導の展開
— 自己決定する場面設定の工夫を通して —

1 主題について

外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」である。つまり、外国語に慣れ親しむことを通じて、体験的に理解を深め、コミュニケーションの重要性や楽しさを体験しながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することが必要であると考え。そこで、活動に自己決定をする場面を取り入れ、自分の思いや考えを伝え合う楽しさを体験させたい。自己決定をする場面を工夫することで、児童自ら積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育ち、思考力・判断力・表現力を育むことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 目指す児童像

- 目標を明確にもち、積極的にコミュニケーション活動に取り組もうとする児童
- 自分の思いや考えを表現し合う楽しさを実感する児童
- want to ～などの既習の表現を活用しながら対話している児童

3 単元名 「行ってみたい国を紹介しよう」(英語ノート2・Lesson 6)

4 単元の目標

- 自分の思いや考えが伝わるように、自分が行ってみたい国やその理由も含めてスピーチをしたり友達のスピーチを聞いたりして、友達とのコミュニケーションを楽しもうとする。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- 旅行会社での旅行プラン作りを擬似体験する活動を取り入れ、英語を使いながら会話をし、英語の音声に慣れ親しむ。
(外国語への慣れ親しみ)
- 世界にはいろいろな言語が話されていることに興味をもち、いろいろな国の文化に対する理解を深める。
(言葉や文化に関する気付き)

5 教材観

この単元では、英語はコミュニケーションの道具であるということに気付かせ、児童が行ってみたい国とその理由を積極的に英語で話そうとすることをねらいとしている。

そこで、児童が海外旅行に行くことを想定し、旅行会社での会話を取り上げる。初めに世界の国の言い方や、世界の名所、有名な食べ物などの言い方を知り、その中から自分が行ってみたい国を理由とともに考える。次に、友達同士で自分の行きたい国とその理由を発表し合い、旅行プラン作りにつなげたい。さらに、自分が作った旅行プランを

基に、旅行会社での擬似体験活動を行う。この活動は児童がこれまでに経験してきた表現を用いて行うことができ、自ら考え、判断し、表現することで、楽しくコミュニケーションが図れるのではないかと考える。

6 児童の実態

本学級の児童（男子16人，女子21人，計37人）は、全体的に明るく意欲的な児童が多い。意識調査の結果（表1）からも、多くの児童が外国語活動を楽しく感じていることが分かる。これまでの外国語活動を振り返ってみても、歌、ダンス、ゲーム、チャンツなども積極的に活動する児童が多い。グループ活動を取り入れた授業では、相手の立場に立って思いやることができる態度が見られる。また、ALT に対しても会話や質問をするために、自分から進んで関わろうとする児童も見られる。しかし、自分の気持ちを友達や ALT に伝える事が苦手な児童も少なくない。これは、自分の考えを言うことが恥ずかしいという気持ちと、自分の考えや気持ちを伝える活動や学習形態に課題があったのではないかと考える。

表1 外国語活動に関する意識調査（平成23年6月25日実施 第6学年2組37人）

	質問内容	回答 (人)			
		とても楽しい	楽しい	あまり楽しくない	楽しくない
1	外国語活動の時間は楽しく活動できていますか。	8	26	3	0
2	ALTの先生や友達に進んで関わる事ができていますか。	3	27	7	0
3	英語やジェスチャーで自分の気持ちを伝える事ができていますか。	4	19	14	0
4	相手の顔を見て、笑顔で聞いたり、話したりできていますか。	3	26	8	0

7 研究主題に迫るための手立て

(1) 振り返りカードの活用

これまでの外国語活動では、授業の最後に振り返りカードを配り、その時間の活動を振り返って記入するという使い方で実践してきた。本研究では、授業の最初に具体的な到達目標等を振り返りカードに示すことで、より充実した活動につなげることができるのではないかと考え、活動の初めに振り返りカードを提示することにした。

振り返りカードを作成する際には、評価の指標を活用する。そうすることで、思考力・判断力・表現力の見取りや、児童の活動意欲の高まりにつながるようにする。

(2) 本時の活動につながる導入の工夫

本単元では、“I want to go～.”という表現を扱うが、この表現に加えて、行きたい理由を表現するための“I want to see (eat, play)～.”等の表現も扱う。このような表現がスムーズに言えたり、児童の活動意欲を高めたりするために、黒板には様々な国の名所や有名な食べ物やスポーツ等の写真を掲示する。

また、導入の工夫の一つとして、ALTからのスリーヒントクイズを行う。三つのヒントからALTの行きたい国を当てるクイズである。聞く必要性を児童に実感させながら意欲的に活動できるようにする。

(3) 場面設定の工夫

本学級には、海外旅行経験者が多いので、行ったことがある国や行ってみたい国への関心が高い。そこで、旅行会社でのやり取りを活動場面に設定することで、児童の活動への関心を高めたい。自分が旅行者となって行きたい国を伝えたり、旅行代理店の店員となってお勧めのプランを伝えたりする活動に意欲的に取り組むことができると考える。

お勧めプランも五つのコースを設定し、旅行者がどのコースを選択するかを考える時間を大切にする。活動の仕方をデモンストレーションで見せるが、それを参考に自分なりの表現を付け加えることも大切であることを伝え、活発な活動場面となることを目指す。

(4) 自己決定の場面づくり

第3時では、行きたい国とその理由を友達同士で伝え合い、五つのコースから一つを選び、お勧めのプランを作成する活動を行う。それを基に本時（第4時）の自分が行きたい旅行ツアーを決定する活動につなげる。

本時の活動は、児童の実態を踏まえて、発展的な活動として取り上げる。単なる旅行先選びの会話に終わらせるのではなく、自分が行きたい理由と相手が勧める内容を聞いて考え、判断するという過程を意識させながら活動させる。

8 指導と評価の計画（4時間取り扱い）

時	主な活動内容	コ	慣	気	評価規準（方法）
1	「世界の様々な言葉を知ろう」 世界の名所などの英語での言い方を知る。			○	・世界の名所の言い方が英語と日本語で違うことに気付いている。 (行動観察)
2	「行ってみたい国を調べよう」 自分が行ってみたい国とその理由を考える。			○	・自分が行ってみたい国とその理由を言っている。(行動観察)
3	「行きたい国を尋ねよう」 自分が行きたい国とその理由を発表し、お勧めのプランを作る。			○	・行ってみたい国やその理由を尋ねたり答えたりする表現を使って紹介している。 (行動観察)
4 本時	「世界旅行へ行こう」 旅行代理店のアドバイスを基に旅行プランを決定する。			○	・自分の思いや考えを工夫して言っている。(行動観察) ・相手の理解を確かめながら話している。 (行動観察)

9 授業の実践

(1) 目標

- 自分の思いや考えを工夫して伝える活動を通して、互いの理解を確かめながらやり取りを継続するとともに、自分の旅行プランを決めようとする。

(2) 展開

時間 (分)	児童の活動	(◎は評価)	
		教師の指導 (HRT)	教師の指導 (ALT)
3	1 はじめのあいさつをする。 Hello, Ms. Hara and May.	・児童と一緒に挨拶をする。	・挨拶をする。
2	2 歌を歌う。 ♪手遊び ABC Song ♪を歌う。	・体を動かしながら、全員がリラックスして楽しく歌えるように一緒に歌う。	・児童と一緒に体を動かしながら楽しく歌う。
5	3 スリーヒントゲームをする。 I like ～. I want to see (play, eat. . .)等のヒントを聞いてどこの国かを答える。	・ALT のヒントをよく聞いて考えるように助言する。	・その国の名所や有名な食べ物等、順番に三つのヒントを出す。
3	4 本時の活動を知る。 Let's Go Abroad!	・本時の活動を知らせ、めあてを確認する。	
20	5 五つの旅行プランから、旅行者の希望を聞いて、その希望にふさわしいプランを勧める会話をする。 店員：Hello! 客：Hello! 店員：What's your name? 客：My name is ～ 店員：Where do you want to go? 客：I want to go to ～. 店員：What do you want to do? 客：I want to ～. I like ～. 店員：How about this plan? ※時間で店員と客の役割を交代する。	・ALT と旅行会社での会話のデモンストレーションを行う。 ・会話の進め方を確認するが、自分の表現したいことがあれば自由に自分の言葉で伝えてもよいことを助言する。 ・店員役や客役になった児童が表現に困って活動が止まらないように助言する。 ・自分の行きたい国のプラン等について楽しく紹介できるようペアでの活動を取り入れる。 ◎店員役の理解を確かめながら、自分の旅行プランを決めようとしている。(行動観察)	・会話の進め方をHRTと一緒にデモンストレーションをする。 ・会話が思うように進まないグループに助言する。 ・会話がスムーズに進んでいるグループを賞賛する。
5	6 自分の行きたい国と勧められたプランについて、友達に紹介する。	・決定した旅行プランを友達に紹介する。英語で紹介することが難しい時は、日本語で紹介してもよい。	・英語での言い方が分からない児童には助言する。
5	7 活動の振り返りをする。 ・振り返りカードに記入する。 ・感想を発表する。	・本時の活動で、良かった活動場面を紹介し、次時の活動の意欲を高める。	・本時の活動で良かったことを紹介し、賞賛する。
2	8 終わりのあいさつをする。	・児童と一緒に挨拶をする。	・終わりの挨拶をする。

10 授業の分析と考察

(1) 振り返りカードの活用について

導入の段階で評価の指標を活用した振り返りカードを提示したことで、本時における自分の到達目標が明らかになり、目標を達成しようと児童は工夫しながら活動に取り組むことができた。児童の振り返りカードには、「最初に何を頑張れば良いかが分かったので活動しやすかった。」、「自分の考えを英語で伝えられて楽しかった。」等の感想が多く記述されていた。振り返りカードの活用を工夫したことで自分の思いや考えを表現し合う学習活動につながったと考える。

(2) 本時の活動につながる導入の工夫について

本時の活動につながるように、ALTによるスリーヒントクイズを毎時間実施してきた。児童も意欲的に取り組み、答えのひらめきも徐々に早くなっている。ヒントの出し方もできるだけ同じ形式、同じ表現にすることで本時の活動で自分が行きたい国の理由を考える際のヒント、そして相手に伝える際の表現の参考になったと考える。

(3) 場面設定の工夫について

自分の思いや考えを表現し合う活動として、旅行会社での場面を設定したことは、より臨場感あふれる場面になった。資料1の旅行パンフレットの活用、資料2の旅行会社の設定、資料3の教室環境の工夫を通し、児童は意欲的に活動することができた。あまり外国語活動に積極的ではない児童も、自分の思いや考えを表現しようと積極的に活動する姿が見られた。

資料1 旅行パンフレットの活用

資料2 旅行会社での会話

資料3 教室環境の工夫



(4) 自己決定の場面づくりについて

旅行者役の児童は自分の行きたい国とその理由を伝え、旅行会社役の児童はその内容を理解した上でお勧めのプランを紹介する活動を行った。どの旅行プランが自分に合ったものかを考え、旅行プランを選ぶことができた。このことは、自分の思いや考えを表現し、その思いや考えが理解された喜びを実感できた場面であったと考える。

11 課題

今後は、外国語活動における評価の指標についてより深く研究し、到達目標の提示の仕方や単元構成を考えていきたい。

既習の学習内容を活用する英語科学習指導の展開
— 画像にセリフを付け、発表する活動を通して —

1 主題について

既習の学習内容を活用することについては、中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年9月）第2節英語2内容（2）言語活動の取扱いに「学習内容を、言語活動の中で繰り返し学習することで言語材料の定着を図るとともに、それらを実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動において活用させることが重要である。」と示されている。

そこで、既習の言語材料を活用しながら課題を解決していく活動として、プロジェクト型の英語活動を行う。画像にセリフを付け発表するという活動を展開することで、課題を解決するための思考力、判断力、表現力を育むことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 目指す生徒像

- 既習の言語材料を活用し、自分の考えや気持ちを書いて表現できる生徒
- 4技能を統合的に活用することができる生徒

3 単元名 「画像にセリフを付け発表しよう」 (発展的コミュニケーション活動 Project 1)

4 単元の目標

- 画像にセリフを付け発表しようとする。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- 既習の言語材料を適切に用いて、聞き手に分かるように表現する。
(外国語表現の能力)
- 発表者のセリフを理解する。
(外国語理解の能力)
- 画像に合う適切な語彙や表現を理解する。
(言語や文化についての知識・理解)

5 教材観

中学校第2学年1学期の授業では、新出事項の定着を図るためのパターンプラクティスや文法事項を確認するために英文を書いたり、ゲーム的な要素を取り入れたコミュニケーション活動を行ったりしてきた。しかし、そのような活動だけでは、生徒が学習したものを具体的な場面や状況を意識して適切に活用することに不十分である。

第1学年では、各学期に1回、既習の学習内容を活用するプロジェクト型の英語活動を行った。第2学年になり、過去の文、未来の文、不定詞の用法を学習している。これまでの言語材料を活用させるために、画像にセリフを付け発表するという活動を通して

自ら考え、表現する指導を展開していきたい。

6 生徒の実態

「具体的な場面や状況を考えて英語を使っていますか。」という意識調査（平成23年9月2日実施，中学校第2学年1組27人）を行った結果，「はい」と答えた生徒は8人であった。また，「明日何をする予定なのかを相手に尋ねる場合，英語ではどう表現しますか。」という質問に，話して表現できた生徒は6人，書いて表現できた生徒は4人であった。これは，学習した表現を具体的な場面や状況の中で活用し定着を図る活動が十分ではなかったことが理由と考える。

7 研究主題に迫るための手立て

(1) 学習課題の設定について

多様な生徒の考えを引き出し，かつ既習の言語材料を使用すれば，その考えを表現できるように工夫し作成した画像を通して，学習への意欲を高めることができる。画像に登場する人物は3人とし，それぞれのセリフを考えさせることで研究主題に迫りたい。

画像は生徒が書いてみようという意欲をもてるように工夫し6枚作成する。具体的な画像の場面例は，暑い日に外で会話をしている場面，過去の日付を指さしながら会話をしている場面，これからの予定について会話をしている場面等である。このように，特有な表現がよく使われる場面や生徒の身近な暮らしに関わる場面を設定する。

(2) 評価の指標を授業前に提示することについて

本研究では，活動の前に評価の指標を示し，本時の目標が達成された姿を具体的に捉えることができるようにする。今までの授業を振り返ってみると，学習の目標を生徒に提示してはいるが，具体的にどのようなことができれば目標を達成したことになるのかが不明確であった。そこで具体的な達成の姿を事前に生徒に提示することで，生徒の思考力・判断力・表現力を育成していきたい。

(3) コミュニケーション活動に条件を付けることについて

コミュニケーション活動を始める前に3つの条件を生徒に示す。

○1枚の画像は，それぞれ3人の会話にすること。

○聞き手を重視した会話文にすること。

○自然な会話になるようにすること。

このような条件を提示し，生徒が主体的に取り組むことができるようにする。また3人の会話にすることにより，3人ずつにグループ分けした活動の協働作業が活発になると考える。さらに生徒一人一人の知識等を用いて相談しながら作成することで，互いに学ぶ場面をつくりたい。

聞き手を重視した会話文の作成については，聞き手に分かりやすい表現を使ったり既習の言語材料を活用してジェスチャーなどを交えたり，アイコンタクトをしたりして伝えることができるようになることを考える。

自然な会話になるようにすることは原稿を見ないで，意味や内容を考えながら発表する練習となる。この活動は，書いたことにより活用した既習の言語材料の定着を図

るとともに、書く活動を、話す活動に統合する活動となる。

8 指導と評価の計画（2時間取り扱い）

次	時	学習内容と活動	関	表	理	知	評価規準（方法）
1 本 時	1	・教師が作成した画像を見て、登場人物のセリフを考え、英語で書く。	○	◎		◎	・積極的に画像の登場人物のセリフを書いている。 （観察）
	2	・画像にセリフを付けて発表をする。					・既習事項を活用し、画像の登場人物のセリフを書いている。 （観察、ワークシート）
							・聞き手に分かりやすく発表することができる。 （発表観察）

9 授業の実践（本時の指導）

(1) 目標

- 既習事項を活用し、画像の登場人物のセリフを書く。
- 聞き手に分かりやすく発表する。

(2) 準備・資料

画像DVD、コンピュータ10台、画像付きワークシート、自己評価シート、相互評価シート、プロジェクタ、スクリーン

(3) 展開

時間 (分)	学習活動と内容	指導上の留意点・評価（◎評価）
	(第1時)	
2	1 英語であいさつをし、英語の質問に答える。	・生徒を3人ずつのグループに分ける。
3	2 教師の表情や動作を見て、教師の質問に答える。	・英語学習に取り組む環境づくりをする。
5	3 「今晚英語の勉強をする予定の人」を英語で探す活動をする。	・答え方が分からない生徒に答え方を日本語を交えて教える。
5	4 動画に合わせて歌を歌う。	・既習の学習内容を活用することを意識させるため、生徒が英語でどう表現するのか考える時間をとる。
5	5 本時の課題を知る。 (1) スクリーンに映った画像を	・歌えない場合は、口ずさむだけでもよいことを指示する。
		・既習の表現を用いて、生徒にわかるよう

	<p>見ながら，教師のデモンストレーションを聞く。</p> <p>(2) 教師の説明を聞き，課題を確認する。</p>	<p>に，教師3人でデモンストレーションをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題を提示し，本時の内容を押さえる。 ・教師のデモンストレーションを参考に，自分たちの画像のセリフをグループで相談しながら考えることを伝える。
	<p>画像にセリフを付け，発表しよう！</p>	
30	<p>6 画像のセリフを考えて，英文を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・6枚の画像のワークシートを見て，聞き手に分かりやすく伝えるためにはどのような表現を使ったらよいかを考えさせるようにする。 ・どうしても書けない場合は，辞書や教科書を見たり，グループで相談したりして書くことを伝える。 <p>◎ 既習事項を活用し，画像の登場人物のセリフを書くことができる。 (ワークシート)</p>
	(第2時)	
20	<p>7 画像にセリフを付けて発表をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表原稿を見ずに発表を行えるよう，練習をする時間をとる。
25	<p>(1) グループのコンピュータを使って発表練習をする。</p> <p>(2) グループごとに前に出て発表をする。</p> <p>(3) 他グループの発表を聞き，相互評価をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表では，表情をつけたり，ジェスチャーを交えるなど，聞き手に分かりやすく伝えることを意識させる。 ・生徒が集中して発表を聞けるように，相互評価シートに感想を書かせる。 ・自信や達成感をもたせられるように，生徒の活動を認め励ます。 <p>◎ 聞き手に分かりやすく発表できる。 (発表観察)</p>
5	<p>8 自己評価をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の理解度を確認するため自己評価を行う。

10 授業の分析と考察

(1) 学習課題の設定について

生徒はグループで相談したり，教師に助言を求めたりして，画像に合う適切なセリ

フを考えて英文を書くことができた。画像を工夫したことによって、生徒たちは「過去形を使った文」、「be going to ～を使った文」を書くことができた。事後の意識調査（平成23年9月19日中学校第2学年1組27人）における「学習した英語を使うことができましたか」の質問に、「できた」、「だいたいできた」を合わせて20人の生徒が回答した。具体的で分かりやすい画像を用意したことで、生徒が主体的に考え表現することにつながったと考える。

(2) 評価の指標を授業前に提示することについて

活動に入る前に、学習目標だけでなく具体的な到達目標を提示することで、学習意欲は向上し、コミュニケーション能力の育成に効果的であった。授業後の意識調査の結果では、「具体的に目指すことがあったほうが活動しやすかった。」、「目標と評価があるほうがよりよい発表を目指せた。」、「具体的な目標が分かるので、がんばろうという気持ちになった。」という記述が多く見られた。

教師としては、最終到達目標に応じた評価の指標を明確にすることで、指導の手立てをより具体的に検討できるようになり、言語活動作成にも有効であった。

(3) 活動に条件を付けることについて

ある画像にセリフを付ける場面では、次のような生徒のやりとりがあった。

生徒A：楽しかったって英語で何て言うんだろう？
生徒B：“fun”って言うんじゃない。
生徒A：それはおもしろいという意味で動詞じゃないよね。
生徒B：“enjoy”じゃない。
生徒C：でも習ってないし、分からない人もいると思うよ。
生徒A：“have a good time”は？
生徒B：そうだね、この言い方だったら分かるし、過去だからhave を hadに変えれば「楽しかった」になるね。

聞き手を意識して、場面に応じた適切な表現を考えていることがうかがえる。このように聞き手を意識した会話文の作成を通して、聞き手に分かりやすい表現を考えて書いたり、書いた英文を読み直して校正したりした。また、発表活動を通して、既習の言語材料を活用してジェスチャーなどを交えたり、アイコンタクトをしたりして伝えることができるようになったのではないかと考える。普段の授業で教科書を読んで習得した既習の学習内容を書いたり発表したりして、書き、話し表現する活動につなげることができた。また、発表を聞き理解することで4技能を統合的に活用できた。

11 課題

今回の研究では、事前に評価の指標を提示することで研究主題に迫ろうとしたが、設定内容の根拠については課題が残った。指標が細かくなりすぎて、生徒に分かりにくかった点、そして設定内容が生徒のパフォーマンスを適切に見取るものになっているかという点である。今後も言語活動の工夫と、その評価について研究を進めたい。

言語運用能力を養う英語科学習指導の展開
— 技能の統合的な指導を通して —

1 主題について

英語科の研究主題に迫るため、本実践では生徒が自ら考え表現する活動をするために必要な、言語運用能力の向上を目指す指導の研究を行う。言語運用能力とは、実際に会話をする場面で既習の知識等を活用して、英語で書いたり話したりして表現できる能力と定義する。そのための手立てとしてインプットからアウトプットまで、段階的な技能の統合を図る指導をする。

教材となる英文の内容理解段階における「読む」活動を通して得た言語材料を基に、自分の考えを伝え合う「話す」活動、「聞く」活動という技能の統合した活動によって言語運用能力が養われ、思考力、判断力、表現力が向上していくと考える。

2 目指す生徒像

- 既習の言語材料を活用しながら読んだ英文について考えたことを、送り手として伝えたり受け手として理解したりすることができる生徒。
- 4技能を統合的に活用することができる生徒。

3 単元名 Lesson 8 The First Mission to America CROWN English Reading
(三省堂)

4 単元の目標

- 読解した英文の内容を意欲的に自分の言葉で伝え、内容に関連する質問にも積極的に答えている。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- 伝えたい内容を適切な英語表現を使って伝えることができる。
(外国語表現の能力)
- 英文の内容を理解し、その内容を踏まえて自分の意見や考えを述べることができる。
(外国語理解の能力)
- 英文の背景となる文化に興味をもち理解している。
(言語や文化についての知識・理解)

5 教材観

福沢諭吉の『福翁自伝』の一節の英訳に基づいて編集された単元を教材として用いる。この単元は、若き日の福沢が咸臨丸でアメリカに渡航したときの様子を描いている。当時の日本人にとって西洋文明がどのように映ったか、どのように西洋文明と接したのかを知ることができ、生徒も自分たちの立場と比較することで興味深く読むことができる内容である。異文化理解・国際理解についての材料を提供する

ことをねらいとして編集されており、生徒に積極的なアウトプットを促すことのできる内容である。

6 生徒の実態

本校の3年生はほぼ全ての生徒が4年制大学への進学を目指している。本実践の対象クラスは大学進学の意欲は高いが、英語を苦手とする生徒が多い。模擬試験では全国平均点以下の生徒が約半数いる。

本実践前に意識調査を実施したところ、英語の学習は嫌いではないが苦手意識をもっている生徒が多いことが改めて分かった。また、英語学習についての関心度と苦手意識を調査したところ、アウトプットにあたる、「話す」、「書く」ことを苦手とする傾向が分かった。また、3年生なので英語の知識（語彙・文法）を身に付けることに関心があるという回答が多かった。一方で、英語の学習を通じて今後どのような力を付けたいかとの問いに、日常会話に困らないくらいの英会話力を付けたいと回答する生徒が33人中23人おり、授業でのアウトプット活動を望んでいると推察できた。

これまでの授業は、本実践の指導と似たような段階を踏んではいるが、教材の内容理解を主な目的としており、また、それぞれの段階が連続性がなかった。例えば音読はその先の目標を提示していないため、生徒は発音の確認程度としか認識していない。また、内容理解に重点を置いているようで、実は単に英語を日本語に置き換えているに過ぎず、深い内容理解を促していないと感じている。

以上のことから、授業の各段階を関連付けたアウトプット活動を念頭において読んだり聞いたりすることで、深い内容理解を促し、読解力と共に表現力の伸長を図る。

7 研究主題に迫るための手立て

言語運用能力を養う指導を行う授業では、いかに生徒にアウトプットをさせるかが重要であると考えられる。教科書中心の活動や教科書の文章を活用して生徒のアウトプットを促す活動については、様々な実践例や指導案が紹介されている。村野井(2009)は、アウトプット活動はそれだけを単独でやろうとすれば失敗することが予想されるため、提示、理解、練習、産出のそれぞれを効果的に行い、関連させることが第二言語能力の発達につながると述べている。したがって、本実践でも話す活動のみを単独で行うようなことはせず、現状の授業スタイルのマイナーチェンジをして、「段階的指導」を工夫し技能の統合を図ることとした。

以下に記した段階は、教科書を用いるリーディングの授業において、どのレッスンを扱っても行えることを目指している。

(1) 手立て1：段階的指導

ア ステージ1：インプット

(ア) 口頭導入 (Oral Introduction) および英問英答 (Q&A)

新しい題材を扱うにあたり、その意味内容を教師が既習の語彙や表現を使って口頭で説明する。また、Q&Aで生徒の知識や経験を問う。生徒のもつ背

景知識を活性化し、平易な英語で題材について述べることで、アウトプットの段階で生徒が行う活動のモデルを提示しQ&Aを通して英語を話すウォーミングアップをすることがこの段階の目的である。

(イ) 新出語句

新出語句の意味を確認する際、日本語の意味ではなく、英語の定義によって理解することを目指す。新出語句の意味確認を予習として行うことを促すワークシートを、前時の終わりに生徒に配布し使用する。生徒はワークシート上の英語の定義にあたる新出単語を教科書から探し、記入しておく。定義を読んだだけで探せる語もあれば、新出語の日本語訳を確かめてから改めて英語の定義を読む場合もある。後のアウトプット活動で必要となる語彙を、既知の単語で表現できると認識し、できるだけ多くの英文を読むことを目的とする。

イ ステージ2：理解

(ア) 内容に関する質問 (reading questions) の提示

予習用ワークシートにreading questionsを載せて読み取りのポイントを提示し、あらかじめ答えを記入してくるよう指示することで、本文の内容理解に関する予習を促す。

(イ) リスニング

英語のネイティブスピーカーが朗読している教科書付属のCDを使用して本文を聞かせる。音の切れ目にスラッシュを入れながら聞くことにより、意味の区切りを確認させる。また、予習の段階で意味が取れなかった文など、次の内容理解の段階に向けて各自焦点を当てる部分を確認させる。

(ウ) 内容理解

従来の精読にあたる部分であるが、すべての文の和訳や説明を行うわけではなく、パワーポイントを用いて必要な部分だけ解説したり、理解を確かめるために生徒に日本語に直させたりし、単調にならないように行う。また、アウトプット活動の時間を十分に確保するためにできるだけ短時間で行うよう工夫する。

ウ ステージ3：練習 (音読)

内容理解が済んだ後、音読を行う。教師やCDについて発音などを確認するrepeating、その次にできるだけ教科書を見ずに音読するread and look up、仕上げとしてCDの音声と同時に読むshadowingなどと段階的にレベルを上げる。アウトプット活動を念頭において内容や表現をできるだけ定着させることを目的とする。

エ ステージ4：アウトプット

(ア) 絵やキーワードを見ながらのretelling (再話)

ペアまたはグループで、教科書本文は見ずに、本文に関する絵やキーワードのみを見ながら、読解した英文の内容を聞き手に伝えるretelling活動を行う。

(イ) インタラクション (extra questions)

retellingを聞いた後、読んだ英文や相手のretellingを聞いたことに関連した質

問をし合い，答え合う活動で自分の感想，意見などを述べ合う。

(ウ) 自己評価／相互評価

教師が提示した評価の指標をどれだけ達成できたかについて，評価の指標（手立て2参照）に基づき，生徒は自己評価と相互評価を行う。

(エ) アウトプットした内容の文字化

ワークシートにretellingで発話し合ったことを英語で記入する。生徒にとっては，改めて自分が発話した語彙や文構造を確認する機会となる。提出させることで教師にとっては生徒のパフォーマンスを確認，評価することができる。

(2) 手立て2：評価の指標の活用

評価の指標を作成し，活動の目標を設定する。生徒に示すことで目標が明確になり客観的自己評価，相互評価の拠り所となる。また，教師にとっては生徒の実態に応じた授業の手順，指導内容を再考する手段となる。

8 指導と評価の計画（10時間取り扱い）

時	段落	学習活動と内容	関	表	理	知	評価規準
1	Introduction	導入 背景知識の活性化	○				英文の背景に興味をもっている。
2	1・2	語句の導入・内容理解・音読			○	○	新出の語彙や文構造を理解している。
3	3・4				○	○	
4	5・6				○	○	英文の内容を正しく理解できる。
5	7・8・9				○	○	
6			アウトプット活動 (retell & interaction)		○	○	
7	10・11	語句の導入・内容理解・再話		○	○		
8	12・13	語句の導入・内容理解・音読			○		英文の内容を正しく理解することができる。
9 本 時	14	語句の導入・内容理解およびアウトプット活動		○	○		適切な英語で内容を伝えることができる。 相手の発話を理解できる。
10	まとめ	Exercises 演習				○	語句や文法事項を理解している。

9 授業の実践（本時の指導）

(1) 目標

- 英語で伝えたい内容を適切に伝える。（外国語表現の能力）

(2) 準備・資料

- 予習用ワークシート（新出語句およびreading questionsの提示）
- 本文解説およびイラスト提示用パワーポイントファイル
- 本時の評価の指標
- ワークシート（ペアワーク用（自己評価／相互評価記入欄を含む）・retell記入用）

(3) 展開

時間 (分)	学習活動	活動 形態	活動内容	指導上の留意点・評価 (◎評価)
1	1 Greeting	一斉	・英語であいさつをする。	・英語の授業の雰囲気づくりをする。
5	2 Review	一斉	・前時に学習した箇所の音読（shadowing）。	・shadowing がスムーズに行えるかどうかで、前の時間の内容が定着していることを確認する。
5	3 Vocabulary Check Oral Introduction	個人 一斉	・本時の新出語句確認 ・ワークシート上の語句と定義を一致させる。 ・発音・アクセントを確認する。	・指名して答えさせる中で宿題の確認をする。 ・retell に有用な言い換え表現を確認する。
15	4 Comprehension Oral Introduction	一斉 個人	・1文ずつ英文を確認し、教師の質問に答える。 ・必要に応じてノートに記入する。	・パワーポイントを使用し説明する。 ・文の構造等を理解しているかどうか適宜質問する。
7	5 Reading practice	一斉	・様々なパターンで音読練習を行う。	・様々なパターンの音読を、分かりやすく説明する。
15	6 Retelling & QA	ペア 個人	・スクリーン上のイラストを参考に retell を行う。 ・パートナーに本時の内容に関連する質問をする。 ・ワークシートに自分が話した英文を記入する。	・パワーポイントでイラストをスクリーンに提示。 ・retell を聞いて質問をし、会話を促進させる。 ・評価シートへ自己評価・相互評価を記入させる。 ◎提出されたワークシートにより取組（パフォーマンス）を評価する。

2	7 Consolidation	・次時の確認 ・課題提出の指示	・次時の予告・予習の指示を行う。
---	-----------------	--------------------	------------------

10 授業の分析と考察

(1) 手立て1：段階的指導の成果

ア アウトプット活動を促すインプット活動

Oral Introductionや英語での語彙のインプットを行った結果、生徒は事後のアンケートで「表現方法はいくらでもあると思った。」、「自分で文を作るのは大変なイメージがあったけれど、ありふれた簡単な表現などで書くことができることがわかった。」等の回答をした。このことから本研究におけるインプット活動はアウトプット活動を促す手立てとして有効であったと考える。一方で、「自分の知識があまりなく、上手に話せなかった。」、「retellingは単語ばかりになってしまい、うまく文にできず難しい。」というコメントから、単語やフレーズのレベルから、節や文レベルで英語が口をついて出てくるようなインプットや音読練習の工夫が必要であると考えられる。

イ 英語学習への関心・意欲・態度を高めるアウトプット活動

生徒の言語運用能力を養うには英語学習への関心・意欲・態度の向上は必要不可欠である。事後の意識調査では「話すこと」への関心度が増すという結果が出た。また、「retellingを始めてから英語を話すことに対して少し抵抗がなくなった。」、「英文法や読解はあまり得意ではないが、話すことは好きなので授業が楽しい。また自然と発音にも気をつかうようになった。」等の回答により、アウトプット活動が英語学習への積極的な態度を養うのに役立ったことが分かった。

また、「retellingをすると読んだ内容がきちんと頭に入るので、復習がしやすかった。」という回答も得られた。この生徒はアウトプット活動をすることにより理解が深まったと実感している。このことから、リーディングの授業においても技能を統合的に使わせることで理解を促し、学習に対する積極的な態度を育むことができると考える。

ウ 思考力、判断力、表現力の伸長

本研究以前にも、ペアワークでお互いに質問を作って相手に聞く、といった活動を行うことはあったが、複数のペアが同じような、独自性のない質問を作ってしまったたり、何を話していいか分からず沈黙、あるいは日本語で話してしまったりということが多く、アウトプット活動として機能しなかった。しかし、今回のretelling後にextra questionsを出し合い、会話を続ける活動では、それぞれのペアがインタラク션을活発に継続させている様子が見て取れた。福沢諭吉がアメリカから船で日本に戻ってきたときには水不足で、何日も入浴できずにいたという本文の内容から、「あなたは何日間入浴せずに耐えられるか。」、「アメリカに船で行くことについてどう思うか。」、「5年ぶりに海外から日本に帰ってきたら最初に何をしたいか。」、「福沢は青い目の人や白人や黒人を見てどう思ったと思うか。」など、内容を踏まえてペアごとに様々な質問を

し合い、話を発展させ盛り上がる様子が見られた。

手立て1の段階を踏まえることが、英文を説明できるくらい理解することに加え、質問を考え、内容に即しているか判断し、それを英語で表現して相手の答えを引き出すという一連の力を育むのに役立ったと考える。

(2) 手立て2：評価の指標の成果

ア 評価の指標の効用

評価の指標を使用する前は、ペアワーク時などに活動が何なのか把握できない、あるいは目標が明確でないなどのために活動が滞る様子が度々見られた。また、評価の指標導入後も、初めは指標が具体的でなかったため成果があまり見られなかった。

これらを踏まえ、本時（第9時）に向けて評価の指標を再度作成し、授業開始時に提示して行動目標を明確かつ具体的にし、活動後の自己評価や相互評価を予告して授業を行ったところ、生徒のパフォーマンスに変化が現れ、評価の指標を参照しながら活発に活動する様子が見られた。

表1は第7時と本時（第9時）の生徒がretellで言及した内容を、3人の生徒を抽出して比較したものである。retell時になるべく多くのイラストに言及してストーリーを相手に伝える、という評価の指標に沿って活動したことが分かる。

表1 retellで言及したイラスト数の比較

	第7時 (イラスト5枚)	第9時 (イラスト6枚)
生徒A	3枚	6枚
生徒B	3枚	5枚
生徒C	3枚	4枚

また、事前の意識調査（評価尺度は5（あてはまる）から1（あてはまらない）まで5段階）では「英語で話して情報や考えなどを伝えることが苦手である。」という生徒が多かったのだが、事後の意識調査ではその数がやや減少し、「読んだ内容を英語で相手に説明する活動に積極的に取り組んだ。」という生徒が多く見られた。評価の指標の提示により、何が求められているかが明確になったことで、上位の評価の指標を目指して積極的に表現活動に取り組むようになったと考察できる。

イ 技能の統合

表現の能力と理解の能力の目標として、アウトプット活動を意識して内容の要点や意味を把握することを挙げることにより、読む力が向上すると仮定し、250語程度の同レベルの初見の英文（設問5問）を使って検証授業の事前と事後にWPMを測定した。WPMとはword per minute、つまり英語を1分間に何語読めるかである。250語の英文を読み、設問に答え終わった時間から算出する。得られるデータからは、被験者の速読力と読解力が分かる。結果は右の通りで、WPMの値が上昇した生徒は31人中22人であった。

表2 検証授業前後のWPMの変化

	WPM 平均	正答率平均
事前	89 語	71%
事後	114 語	87%

正答率が上がっていることについては、アウトプット活動を意識して英文を読む段階を踏まえた活動をした結果、英文を読みながら考える力（思考力）が向上

したからと考えられる。また、1分間に読める語数が向上したことは、retellすることを目標として、要点をつかむ速読を意識して読む活動を行ったため、速読力が養われた成果であると考えられる。

11 課題

今回の研究を通して、技能の統合を図ることはできたが、生徒の思考力がどの様に変容したか、また、思考力と表現力の関連性を明確にすることができなかった。今後も教科書を活用した段階的指導の工夫を継続し、生徒が既習の知識を活用しながら思考力・表現力を高める言語活動の工夫改善を図り、かつ生徒の活動目標となる評価の指標の妥当性・信頼性について追究する。

〈参考文献〉

村野井仁(2009)「インプットとアウトプットをつなぐ教科書中心の授業—教室S LA研究からの示唆」『英語教育』Vol.57 No.12 31-33

3 研究のまとめ

外国語活動・外国語（英語）科では、研究主題「自ら考え表現する外国語活動及び外国語（英語）科学習指導の展開」に向け、言語活動を工夫しコミュニケーション能力を育成する授業づくりを通して研究を進め、県内小学校2校、中学校2校、高等学校1校で授業研究に取り組んだ。

以下、研究の取組から本研究についての主な成果と課題を述べる。

(1) 成果

ア 小学校では、学習形態を工夫し段階的なコミュニケーション活動を計画的に位置付けることが効果的であった。

ペアで行う、グループで行う、全体で行うというように、個から全体へとコミュニケーション活動を広げていくことは、自分の考えを相手に伝えるという児童の心理的な負担を軽減すると共に、インプットされた言語材料を繰り返し使う機会を確保することができ、アウトプットする際に、自信をもって自分の思いや考えを表現することにつながった。

また、児童が自分の思いや考えを伝え合う必要性を実感できる場面を設定することは、積極的に表現する活動につながり、思考力・判断力・表現力の育成に効果的であった。

イ 中学校、高等学校では、「聞く」、「読む」、「書く」、「話す」の4技能を統合的に活用する言語活動が思考力・判断力・表現力の育成に効果的であった。

画像に合うセリフを書き、発表するという自由度の高い創作活動は、適切な表現を探究する活動につながり、思考力・判断力・表現力の育成に効果的であった。

また、表現力を高めるには、日々の指導の積み重ねが重要であるため、日々使用する教科書の活用を欠かすことはできない。教科書にある英文の文体を変換するライティング活動は、読み取り、音読、暗唱、要約といった単調な活動を、分析的な読みや5W1Hを意識した正確な英文を書く活動にまで質を高めることができ、豊かな表現力を育成する言語活動につながった。リテリングについても、インプットした内容を、自分の考えでアウトプットするコミュニケーション活動を単元計画に位置付け、生徒に活動内容を知らせることで、インプットの質の高まりと活用しながら定着を図る活動につながり、言語運用能力を高める上で効果的であった。

ウ 思考力・判断力・表現力を育むための言語活動の工夫すべき点として、「思考・判断した過程や結果を言語活動等を通じて児童生徒がどのように表出しているかを適切に評価すること」を再認識することができた。

今回の研究では、指導者がどのような思考力・判断力・表現力を身に付けさせるかを明確にするために評価の指標を作成し、それを活動前に児童生徒に示すことで、指導者は目指す姿に達するまでの指導の在り方を明らかにすることができた。児童生徒も、何を、どのようにすれば目標を達成できるのかを考えながら質の高い自己表現活動を行うことができた。評価の指標を基に適切に評価することで、思考力・判断力・表現力の育成につなげることができた。

(2) 課題

小学校・中学校・高等学校学習指導要領に示されているコミュニケーション能力を育成する視点から、言語活動の更なる充実を図ることができるコミュニケーション活動を工夫する。また、観点別学習状況の観点の趣旨を踏まえた評価の妥当性、信頼性を高める評価の指標の作成について研究する。

〈引用文献〉

- 文部科学省 「小学校学習指導要領」 平成20年3月
文部科学省 「中学校学習指導要領」 平成20年3月
文部科学省 「高等学校学習指導要領」 平成21年3月
文部科学省 「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」 平成20年8月
文部科学省 「中学校学習指導要領解説 外国語編」 平成20年9月
文部科学省 「高等学校学習指導要領解説 外国語編」 平成22年5月

関係者一覧

1 研究協力員

守谷市立松前台小学校	教諭	大堀 玲子
つくば市立竹園東小学校	教諭	原 恵美子
県立並木中等教育学校	教諭	佐野 賢一
銚田市立大洋中学校	教諭	志藤 幸也
県立古河第三高等学校	教諭	鈴木 厚子

2 茨城県教育研修センター

所長	谷田部 佳見
教科教育課 課長	佐藤 誠
同 指導主事	茂在 哲司
同 指導主事	谷津 勉